

【翻訳】

パレツシユ・チャトパディヤイ論文

『ソヴェト問題とマルクス再論』

マイク・ヘインズへの反論』

* 本訳文は、パレツシユ・チャトパディヤイ著、大谷・叶・谷江・前畑訳『ソ連国家資本主義論』（大月書店、一九九九年）[Parash Chatopadhyay, "The Marxian Concept of Capital and The Soviet Experience: Essay in the Critique of Political Economy", Praeger, 1994]に寄せられた批判の一つに著者が反論するもので、原文はイギリスの雑誌「Historical Materialism」の本年冬季号への掲載が決定されている。なお、訳文中の頁数は原文通りとし、文末に参照文献が掲載されている人物については、最初に取り上げられた箇所て原名を付加した。

叶 秋 男

我々は、マイク・ヘインズMike Haynesによる我々の著作への批判を重大な関心を持って読んだ。それは著者の見解を効果的に伝えるまでも有益な論文である。我々は、彼が我々の著作に読者の注意を向けてくれたことに――大部分は注目に値しないのだが――感謝する。彼はソ連の「経済学 (political economy)」研究議題を見事に六点にまとめているが、そのうちの四点が実際に我々の著作に関わるものである――(1)一九一七年革命の性格、(2)一九一七

一九二八年の間のその体制の漸次的変容の性格、(3)一九二八年以降の体制とその初期の成功の性格、(4)その体制のその後の失敗。これらの議論の中で、彼は重要な理論問題を提起している。その長い評論の中で注目すべきは、「マルクス主義」や「マルクス主義者」への言及が多いにもかかわらず、マルクス自身自身の著作への言及が少ないことであり、彼のテキストの中で「マルクス主義」や「マルクス主義者」として言及されている自身は、生産様式としての資本主義と解放事業としての社会主義に関するマルクス(自身)の的確なカテゴリーや彼自身の見解とは無関係であった。最初に論点を明確にしておこう。我々の著作は(ソ連の)「経済学」を扱ってはいない。我々の著作は、著書の副題が示すとおり、「経済学批判」であり、その生産様式、つまり、マルクスのカテゴリーに厳密に従えば、その社会の直接的生産者の搾取様式に焦点を当て、対象とする「社会の構造」を研究している。これに関連して本論文の初節で、テキスト上の分量はそれほどでないが、ヘインズのマルクス描写を扱う。続く四節では、それぞれ、ソ連邦解明の反対アプローチ、一九一七年革命、一九一七年と一九二八年の間のロシア、そして内戦と世界革命の問題を扱う。我々は結論として、マルクスが「マルクス主義者」に対していかに正しかったかを論じるつもりである。

I マルクス描写

ヘインズは、「マルクスは経済学批判を書きながら、資本論で資本主義の分析を進めたいと思っていた」と書いている。この叙述は、ごく控え目に言っても、マルクスの考えを極めて不正確に言い表しているといえよう。実のところ、マルクスは—少なくとも一八四四年のパリ草稿に始まる—経済に関する自分の全著作を「経済学批判」と考えており、それはブルジョアジーを代表する「経済学」に対抗してプロレタリアートを代表するものとして確立さ

れたのである(マルクス、一九六二a、二二頁)。そんなわけで、ヘインズがこの術語で具体的にどの著作を指すのか明らかではない。もし彼が**経済学批判序説**(一八五九年)を指すのなら、なお一層誤っている。序説自体は、資本、すなわち、資本主義を扱っている。その第一篇は「資本一般」と題されている。そこで扱われるのは商品と貨幣であるが、それらは前資本主義のカテゴリではなく、その最も単純な形態が商品である資本のカテゴリである。²⁰この著作でマルクスは、前ブルジョア的存在としてではなく、「ブルジョアの労働の一般形態」として貨幣を表現する(一九八〇年、一六六頁)。その歴史的部分を除くと、その著作は基本的に**資本論**(第二版)の最初の三章を成す。事実、マルクスは一八四〇年代後半(一八四七〜一八四九年)の経済関連論文の中で既に資本主義の本質的特徴の概要を提供しており、一八五七〜一八五八年の膨大な草稿**資本論**の第一(草稿)ヴァリアントの中で、一八六一〜一八六三年の二三冊のノート**資本論**の第二(草稿)ヴァリアントと同様に、広範囲に「資本主義それ自体を分析」している。

ヘインズのマルクスに関する第二の不正確な描写は、「マルクスは主として資本主義を、国家自体が直接に生産を行わない私有システムとして分析することに関心があった」(三六〜三七頁)というものである。

(マルクスにおける)根本的な意味で、資本とは、生産諸条件の所有が私的な「法人」の下にあると、国家の下にあると、「**生産諸条件**」が**資本形態**をとって**社会の少数者**によって独占され、**圧倒的多数の労働者の「非所有物」**である限り、「私有システム」なのである(マルクス、一九八八年、七七頁、強調は原文)。これはマルクスが「社会の一部による私的所有」と同等視する「**階級的所**有」である(一九五六年、二二頁／一九六六年a、七一、七三頁／一九七一年、七五頁)。他方、マルクスは明確に「**資本主義的生産様式自体の限界内**で(個人的)私的所有としての資本の廃止(昇華)」について語った(一九六四年、四五二頁／一九九二年、五〇二頁)。私的所有権の法的廃止を資本主義自体の廃止と同義として「私有システムとしての資本主義」と生産手段の国家所有の対立さ

せるのは、マルクスではなく、第二及び第三インターナショナルの「マルクス主義者たち」の特徴である。そしてまた、ヘインズの主張とは反対に、マルクスは、国家のことを商品生産に従事する「賃労働者」を雇う「資本主義的生産者」と述べている（一九六二年b、三七〇頁／一九七三年、一〇一頁）³。

II ソ連邦解明の反対アプローチ

ヘインズはまず、我々が「ソヴェト経済を国際経済関係から抽象して研究すること」を問題にする。彼は「ソ連邦を世界経済にはめ込まずに分析できるか」（四〇頁）と問う。さて、「ソ連邦を分析すること」は文字通り、経済ばかりでなく、人口、歴史、政治、社会、文化、言語、文芸、その他何であろうと、その全次元を分析することを意味する。それは全く我々が表明した目的ではなかった。拙著の冒頭ではつきりと述べたように、我々の目的はマルクス特有の意味で、すなわち、「社会の物質的生活の基礎を成す」生産様式としてのソ連経済を研究することであった（マルクス、一九六二年a、九六頁／一九六五年、六一六頁）。ヘインズは自分の立場を弁護して、「マルクス主義は世界経済を出発点とする」とのトロツキーTolstoyの見解を引用する。ここで問題になっているのはどの「マルクス主義」であろうか。そして何のための「出発点」であろうか。もしも「マルクス主義」によってトロツキーが自分の思想や他の「マルクス主義者」の思想を意味するのであれば、それで我々が悩まされることはない。我々にとって真に大事なものは、「資本の経済的運動法則を明らかにすること、その結果として「資本主義的生産様式とそれに照応する生産及び交換諸関係を研究すること」を目的とするマルクス（本人）の見解である（一九六二年a、一二頁、一五〜一六頁）。この基本的な目的に関して、彼が明示的に述べた（論題を立てる論理的に唯一の方法である）「出発点」は全く異なっている。要するに、マルクスは、商品はブルジョア社会の「富の基礎的形態」であると

述べた後、「それゆえに我々の研究は商品の分析から始まる」と付け加えるのである(一九六二年a、四九頁、強調は筆者)。マルクスは、世界経済が自分の研究の「出発点」だなどと何処にも述べていない。更に言えば、彼らが言うところの「世界経済」とは何であろうか。文字通り、それは地球全体に及ぶ単一の経済ということであろうか、もし「経済」を(上述したような)マルクスの意味で取るならば、目下の文脈では、資本、すなわち、地球中、あるいは少なくともその大部分(すなわち、地球上の就労人口の大部分を取り込む)に存在する賃労働(またはマルクスの厳密な意味で)を意味するだけであろう。このことはもちろん「グローバル化」の現代でさえ現実とは程遠い。

強調されるべきは、マルクスが、「原初的収奪」を通じて確立された世界規模での資本を「出発点」とするのでなく、彼の大きいなる著作のフランス語版の中で、資本の生成とその後の発展に関する自分の分析は、地球のごく狭い地域を背景にしていると明言していることである(一九六五年、一一七〇頁)。その地域とは西ヨーロッパのことであるが、直接的生産者の収奪過程―資本の基礎―が徹底して起こったのは、やはりまた一国、つまり英国においてだけであった。後にマルクスは、ヴェラ・ザスーリッチへの手紙―フランス語で書かれた(二八八一年三月八日)―の中でこの点を強調している(一九六八年、一五五八頁)。そんなわけで、マルクスにとって「これまでのところ資本主義生産様式と、それに照応する生産及び交換諸関係の典型的な場所」であるイギリスが「理論的展開の主要な例証」として役立つたのである(一九六二年、一二頁)。おそらくイギリスの「世界経済へのはめ込み」の方がソ連邦のそれとは何かということよりも難澁するが、前者の「国民的」資本主義は自己の社会经济状況の中で自らの直接的生産者の原初的収奪から生成し、「世界経済を出発点」とさせることもなく、マルクスが資本主義を論じる際の例証となりえた。

ヘインズが「国民的資本」などは存在しないというのはもちろん正しい。それは確かに用語上矛盾している。使

用価値ではなく交換価値としての資本の目的と、それに照応する、生産のための生産である資本主義的生産は、「あらゆる人々を世界市場の網の中に編入すること、したがってまた資本主義体制の国際的性格」を必然的に伴う（マルクス、一九六二年a、七九〇頁）。しかしながら、一国が世界市場に取り込まれることは、問題になっているその国の社会的生産諸関係の特殊性を発生させも決定もしない。そのゆえに、一国内で「自給小作人の取奪と彼らの賃労働者への転化」を通じて起こり、その国の歴史に条件付けられ、その「国（独自）の色合い」を帯び、自国の資本のために「国内市場を創り上げる」資本主義の生成及び発展過程の特殊な性格を研究するためには、方法論理由から、実際にはこの内部過程に属さず、かえってそれを分かりにくくさせる自国外の経済諸関係を捨象する必要がある。我々はソ連邦の社会的生産関係の特殊形態を分析した後、一部の「国家資本主義」学派とは異なり、その問題を特別扱わずに「西側」資本主義諸国との対立的競争関係を検討した（拙著、六一〜六二、六六、九一、九六〜九八頁）。このことは、我々の西側からの技術移転に関する言及、ソ連邦における資本蓄積の全過程の基礎たる西側に「追いつき、追い越す」という論理の重要視、あるいは我々が行ったソ連の経済実績と西側のそれとの系統だった量的比較によって確かめられる。ヘインズは明らかにこれらすべてに注意を払わなかった。ヘインズは、我々が「互いに競争する二企業の活動から資本主義の基本特徴を引き出す」考え方、「一本路資本主義（one-street capitalism）」がありえるという考え方を採っていると見做す。そしてその代わりとして、彼は「国家の境界を超えた競争関係に基づく・・・広範な総体性としての資本主義概念」をよしとする。というのも、「世界経済を抽象することは・・・発展（の中で）システム（をなす資本主義の）中核過程を抽象すること」だからだという（四一〜四二頁）。まず指摘したいことは、このかなり散漫かつ冗長な評論の中で、ヘインズは自分の使う諸概念——「資本」（資本主義）、（資本間）「競争」といった中心的概念の大部分——を明確にしていないうことである。我々の著書では、最初の二章を理論的説明に当て、マルクスのテキストを厳密にたどって基本概念を明確にすることから始めた。⁶へ

インズの叙述は、「資本」や「資本間競争」に関する彼と我々の基本的相違をはつきり示している。ヘインズと違い、我々は資本の基本的特徴を資本間競争から「引き出さ」ないし、資本概念を地理的範囲の大きさに依存させることもない。資本間競争自体は、資本の「必然的傾向」、その「剰余労働価値から無限に出てくる (ausspinnen) 傾向」を示す資本主義的生産様式自体の「内的性質」から生じる「資本主義の基本的特徴」の一つである（マルクス、一九五三年、三一六頁／一九七六年、一五七頁）。それゆえ、「資本の内的性質、その本質的傾向」は「多くの資本の相互作用」として競争の中で「現象しかつ実現される」（マルクス、一九五三年、三一六、三二七頁）。資本が剰余価値を実現するのは、それを生産した後の競争を通じてである。競争は「資本自体の他資本との関係」であり、それは「資本の内的諸法則を遂行し実現するが、それらを創り出し (erfindet) はしない。それらを単純に競争から説明しようとすることは、それらを理解していないことを認めることである」（マルクス、一九五三年、六三八頁、強調は筆者）。したがって資本間競争が存在するには、「自由な」賃労働を基礎とした、一つ以上の生産単位の存在が必要かつ十分条件である（マルクス、一九五三年、三三三頁／一九六二年 a、六五四頁）。こうした条件があれば、この場合に地理は資本間競争の存在にとつていかなる役割も演じない。地理は、資本機能の空間的拡張がより大きな規模において個別資本の剰余価値の実現を助ける限りにおいて重要になる。「国境を越えた競争関係」は、資本間競争が——資本の自由な運動が存在し——境界と関係なく地球横断的に起こる場合にだけ問題になり、それは単純に国境内に既に存在する競争の拡張を意味し、資本が国境内で生産される剰余価値の実現上の空間的障壁を受け入れないことを示している。ヘインズはまた、「国家の（積極的な）役割を競争過程の一部」（四二頁）として、そして「競争のテコを経済力、政治力及び軍事力の合成物」（四三頁）として仮定したがっている。生産手段としての資本に関連して問題になるのが資本間競争、つまり、極大利潤を争うそれぞれ独立した生産単位の経済競争であり、それは国家の政治的、軍事的競争と一緒くたにすべきではない。その一つの理由としては、国家の政治的／軍事的競

争はマルクスの時代には大いに存在したが、彼は資本間競争を分析する際にそうした競争を持ち込まなかった。確かにこうした国家間競争は、各国が「国民」資本の地球横断的な運動を促進・助成することによって「外国」資本の同様な運動の進行を妨害しようとする限りににおいて重要な役割を演じる。しかしながら、そのことは資本間競争自体の存在を説明する上でなんらの役割も果たさず、この要素を持ち込むことはただ資本の競争過程の明確な見方を妨げ、そのために（生産関係としての）資本そのものの性質を理解不可能にする。国有企業が国の内外で経済競争者として「私」企業と競争するとき、それらは資本主義的ゲームのルールを保持しつつ、資本の単位として競争するのであり、国家の単位としてではない。

ヘインズは資本主義の「中核過程 (core process)」を引き合いに出す。さて、「中核」とは（種を持つ果実の）硬い中心部分を意味する。もし「中核過程」が基礎的過程を意味するならば、その場合資本主義の中核過程とは直接的生産者の生産諸条件からの歴史上の具体的な分離過程であり、「システム」としての資本主義の発展とは単純にこの分離の拡大再生産のことであるが、ここでは資本に、当然のことながら、受け入れるべきなんらの限界もない。この「中核過程」を説明する上で問題とされるのは、地理的範囲の拡大というよりはむしろ、マルクスが「国内市場」と呼ぶものの拡張である。

ヘインズは、「チャトパディヤイは、法的形態たる国家資産が効果的な利用の点で有効な私的所有を排除するとの考えを否認する」（四七頁）と書いている。さて、不正確なことよ。これも我々の見解ではない。それは（ソ連邦における）「国家資産の法的形態」対「利用の点で有効な私的所有」といった問題ではない。我々は著作の中で、「個別資産の所有権」によって企業を「法人」と見做すソヴェト法自体を引用した（拙著、五二頁）。ソヴェト法は、国家資産形態とは対照的に「法人」と見做される一個別生産単位に企業という名称を与えている。ヘインズは、ソヴェト経済を「単一の仕事場 (single workshop)」と見做す「クリフの規定」に追従し、ソヴェト企業が運営上

「実質的管理」をしており、それゆえに、「管理された自由」の範囲ながらも、競争する資本家として活動していたとする我々の見解(四八、四九、五〇頁)に「当惑」する。まずは、「単一の仕事場」という主張がそのまま、マルクスに従えば(一九六二年 a、三七六頁)、ソ連邦に商品生産と、賃労働があつてそれに照応する資本間競争がある**現実**と矛盾することを述べておこう。ソ連邦は資本主義であるとの規定を維持するために、この矛盾は、この過程全体が単に「中央によって内部に伝えられる」ために「グローバル経済」により外からソ連に押しつけられると仮定することで巧妙に「克服」されている(四九頁)！

ヘインズの当惑は、資本間競争が存在する条件として「中央」と個別生産単位との関係は重要でないことを悟るや否や消滅する。資本間競争は中央対単位の問題などではなく、**単位対単位**の問題なのである。生産手段の法的所有問題や「中央」からの統制問題は別として、根本的なことは各単位の他の単位に対する機能上の自立性である。強調されるべきは、資本主義の本質的実体は**総体性**としての社会的資本である。「マルクスの用語で言えば、ブルジョア法では認定されていない、資本家階級全体によって——法的にいうと——物的形態で「所有される」「社会的総資本」のことである」。社会的総資本は「個別資本とは異なる実存在」(マルクス、一九五三年、三五三頁)を持ち、個別資本は「個々の資本家が資本家階級の一要素にすぎないように社会的総資本の自律的(*verselbständig*)部分」(マルクス、一九七三年 a、三五一〜五二頁)をなすだけである。しかしながら、「多くの資本の相互作用として」、すなわち資本間競争として、「資本の本質的決定因が**現れ、実現される**」場で「資本は多くの資本のように存在するし、存在しえるのである」(マルクス、一九五三年、三一七頁、強調は筆者)。したがって社会的総資本の有機的部分としての個々の資本は——当然ながら——後者に依存する。しかし、個別資本自体は相互に独立しており、「競争する商品生産者同様に互いに対抗しあう」(マルクス、一九六二年 a、六五四頁)。

ソ連邦における資本主義もこの原則から外れるものではなかった。企業はもちろん「中央」、すなわち党—国家に

よつて法的に所有される社会的総資本に抑えられていた。しかしながら、かかる総体の部分として企業は、生産物が商品形態をとる賃労働を基礎とする自立的単位として相互に対抗し合つた。企業長らは、法的には生産手段を所有していないものの、深遠なマルクスの意味で「資本の担い手」あるいは「機能遂行者」であり、「資本家たちは取得した他人の労働の獲物を、平均的にどの資本家も同じだけの不払い労働を取得するように兄弟的敵対的に分け合うのであり」、「競争は、資本家たちが（共に）労働者階級から搾り取る（auspressen）不払い剰余労働量を彼らの間で分け合うための個別資本家の競い合い以外の何物でもない」（マルクス、一九五九年、二二頁）。マルクスの著作の中には、相互に競争し合い、各部分は「それぞれの可除部分を受け取る」が、総剰余価値を自分たちの間で分け合う自立した個別資本所有者がいない場合——一人の人間に属する」すなわち、「単一の資本」の部分として五つに分かれた資本——の資本間競争の説得力のある例が見いだせる（一九六四年、一六九頁／一九九二年、二三五頁）。

いくらかやり方を変え、資本の総体性——通常の（普通の）経済学では認識も理解もされない」（マルクス、一九五三年、三五三頁）単独形態——を理解し、法的な所有の固定状態に囚われずに思考しできるようになるや否や、ヘインズの「当惑」は消滅する。指摘しておくべきは、ソ連邦の内部でもソヴェト経済の「単一の仕事場」観念を問題にする声が上がっていたことである。この点で著しい貢献を果たした人物が不当に無視されたソヴェト経済学者V・P・シエクレドフShkredovであり、彼は既に一九六〇年代に、マルクスの思想にならつて、「経済関係と法律関係の混同」に対してソヴェト御用学者と論戦し、「所有」を「歴史的に決定される社会生産形態と関係なく独立した関係（osoboe otnoshenie）」とみる彼らの概念を批判した。彼は、「国家セクター内での商品関係（tovarnih otnosheni）の存在」に基づきソヴェト企業が相対的（相互的）に独立的である現実を肯定した（一九六七年、三頁、一六三頁、一七九頁）。シエクレドフは二〇年後にその主題を——ゴルバチョフによる企業法改革に関連して——再論して、ソヴェト企業の（相互）分離性及び相対的独立性を再度肯定し、とりわけ「単一巨大工場としての（ソヴ

エト的) 社会主義」の観念を嘲笑した(一九八九年、三二頁)。同様に、著名な経済学者A・G・アガンベギャン Aganbeyanは、ソ連邦における商品=貨幣関係を「国有企業内の独立した企業の相対的孤立性 (omositel'noe obsoblenie)」に起因するとした(一九八八年、一八四頁)。

関連テーマソ連邦における価値法則の存在問題—について今一言。我々はこの問題に関するヘインズの批判に取り掛かる前に、まずこれに関連したヘインズの理論的見解の中にあるいくつかの不正確さについて言及しておく。価値法則に関して彼は、商品の交換比率、各商品の生産量を規制し、全経済的に労働力を配分する法則とするスウィーージーの定式を引用する。しかしながら、これは価値法則ではない。これらはその法則の作用を説いているだけである。マルクス自身が説く、よりの確な見解に立ち返らねばならない。当初マルクスはリカードの「交換価値法則」、すなわち「労働時間による価値決定」について口にした(一九六五年、二五頁)⁸。二年ほど後、彼はより厳密を期し、(リカードにおいて)「労働時間により決定される」のは単に「価値」ではなく、「価値の大きさ」と挿入する(一九八〇年、一三七頁)。最終的に、マルクスはその「法則」を更はずつと厳密にし、「労働時間」に「社会的に必要な」という—リカードにはない—条件を付け加え、資本論の第一章でその概念に関する独自の定義を提出した(一九六二年a、五三頁)。したがって、これこそが基本的にマルクスという「価値法則」の意味なのである。要するに、価値法則が作用するのは、交換可能な労働生産物が「価値形態」あるいは「商品形態」をとるときなのである。さて、続いて第二点目に移ろう。ヘインズは、ソヴェト経済における価値と価格の乖離問題を持ち出し、満足げに「諸商品はその価値ではなく生産価格で交換される(ことを)立証した」かにみえる「転形問題に関する文献」に言及する(五九頁)。もしもヘインズが、指摘した文献の代わりに、マルクス自身の確な—常に彼の反目する支持者や解釈者のそれよりも非常に明瞭な—規定に立ち返る労を取っていたならば、諸商品が、現実(wirklichkeit)には、「生産価格」でも交換されていないことに気づいたであろう。商品は単純に需給によって決まる

「市場価格」で交換されるのであり、それが「生産価格」——マルクスはそれを（統計的に）長期的に成立する平均価格とも呼ぶ——の周りを「絶えず変動する」のである（一九五三年、五六頁／一九六二年a、一八〇〜八一頁／一九六四年、一八八頁／一九九二年、二五四頁）。

さて、ソ連経済におけるこうした価値・価格乖離問題に関する我々の見解に対するヘインズの批判を取り上げてみよう。ここで彼は、我々が「価格と価値の乖離の仕方とその原因に関する問題を十分に取り上げ」ずに「これに関心の持っていない」と非難する。彼は我々の欠陥と自分が言い立てるものを、我々の「世界経済からの抽象」に結びつける（六〇頁）。第一に、我々の研究の——最初に既述した——「関心の中心」は、正しくソ連邦における社会的生産関係——及びそれに起因しそれに照応する政治その他の諸関係（形態）——である。ある社会の——こうした「乖離」がある——交換関係（及びその形態）はそれの生産関係の帰結にすぎない。もしそれが（ソ連邦におけるような）資本主義的生産であるならば、その場合交換関係は必然的に価値関係（「世界経済」であろうとなかろうと）であり、それら固有の機能方式はこの修復——生産者と生産諸条件自体の逆関係——の拡大再生産の必要性にひたすら支配されている。何故社会的生産関係ではなく、こうした「乖離」が我々の「関心の中心」であるべきだったのか定かではない。というのも、我々は、「世界経済からの抽象」にもかかわらず、著作中で、ソヴェト当局による価格システムの故意の操作を指す、指摘されるところの「乖離」「問題を十分に検討する」のになんらの困難もなかったからだ。我々が根拠にしたのは、外部からの軍事的脅威を抱え、後進状態の中で「平和時の戦争経済」（フーヴノヴェ、一九八二年、三九〇頁）としてソヴェト的蓄積過程を進めねばならない特殊性である（五八、一二五、一二六、一四一、一四三頁）。ヘインズは、我々が適切な典拠を示して、多少似た状況にあった——かつての日本やナチス・ドイツのように（戦争以前にも）——他の資本主義国がそうした乖離を作り出すために同様な価格システムの操作を行ったと立証した箇所を「見落とした」ようである。

最後に、ヘインズは、我々がソヴェト労働者は「常に賃労働者」であったと見做していそうな点（三八頁）、ソ連邦における「強制労働」を考慮していなさそうな点（五一頁）について批判する。これもまた我々の見解の誤った解釈である。我々が著書の中で述べたことは、ソヴェト時代の大部分の期間、労働者は「自由な」賃労働者であったということである。しかしながら、我々もソヴェト出典資料を引用して論じたように、一九二八年前後のある期間、強制労働が広がり、時にはそれが「自由な」賃労働と共存していた（拙著、五一、六二、六三、一三五、一五六、一六二、一六三頁）。ここでもまた、ヘインズは明らかに我々の議論を「見落として」いる。

III ロシア革命

ヘインズは、「ロシアは一九一七年後も実質的には変わらないままだった」という見解を我々のものとし、我々が「歴史から離れてロシア革命の民衆的土台を記述し」、「革命に関する限定的説明」の中では、ポリシエヴィキが大衆的支持を得た一九一七年の人民革命という「確かな」性格を無視したという（六二、六三頁）。

最初の点は明らかに我々の見解の不正確な記述である。変わらないなどと指摘するどころか、我々はポリシエヴィキが引き継いだ「前資本主義的」「半封建的」ロシアと、正しく一九一七年以後のポリシエヴィキ治下での資本主義の発達について明確に述べている（拙著、六〇、一五七、一六一頁）。「革命に関する（我々の）説明」の「限定」性に関しては、再度強調しておくが、我々の著作は「限定的」であろうとなかろうと「革命の説明」などではなく、厳密にマルクスの意味においてとりわけ一九二八―一九九一年の期間「ソヴェト・モデル」として機能した――ロシア経済の研究を意図している。我々が著書の最後近くで一九一七年革命に言及しているのは――要するに――ついでにそのブルジョア的性格を特徴づけるためにすぎない。「歴史から離れて革命の人民的土台を記述」ということ

に關しては、我々の見解とはおよそ掛け離れたこの物言いは、そもそもロシアにおける—マルクスの言葉を引用すれば（マルクス及びエンゲルス、一九七二年、九六頁）—「共產主義の不実な同志たち」、つまりポリシェヴィキの見解と完全に一致している（以下で詳述）。

「ロシア革命」に關していくらか詳述してみよう。このやや面白みに欠ける表現は、一九一七年にロシアで起きた二つの異なる局面—二月と一〇月—の革命過程を短絡させる。二月の革命的な大衆による高揚は、上からならぬ組織的指示もなく自然発生的に発生した。トロツキーが不滅の歴史的価値を持つ自伝の中で書いているように、二月革命は下から始められ、革命組織の抵抗を克服し、プロレタリアートの最も抑圧され虐げられた部分によつて自発的に先導された・・・上から大衆に反乱を呼びかけた者はいなかった（一九八七年、第一巻、一〇二頁）。最初のソヴェト（会議）は政治的勝利の直後、有名な「五日間」（二月二三〜二七日）の末日近くに出現し、ロシア中に急速に広がった。これもまた労働者と兵士からなる自然発生的な大規模な現象である。それが起こつたのは、時には農民が—またしても上からの指示なしに—「人民」への土地所有権の譲渡という古くからの要求—このことは君主、国家、教会及び領主に属する土地の収用と配分を意味した—に基づく土地革命運動を開始する前であつた。農民の反乱は、一〇月にポリシェヴィキが権力を掌握する上で強力なテコとなつた。農民たちのソヴェトは後に出現した。付け加えると、ソヴェト運動はこれら二種類以上のものから成つていた。その運動は実際には工場委員会ソヴェト、労働者管理ソヴェト等からなる「一群のソヴェト」を含んでいた（フェロFerro、一九八〇年、一九〜二〇頁）。

概して、ロシア革命の初期の「局面」は、いかなる党指導もなしにロシアの労働者によつて開始されかつ完全に掌握されており、フランスにおける一七八九〜九三年と一八七一年の革命のように過去の偉大な人民革命のあらゆる基本的特徴を有していた。この革命は主として前資本主義的社会秩序を攻撃目標としており、幅広い複数の革命

過程の中で大規模な民主的大衆運動として始まり、様々な政党が次第に自分たちの綱領を労働者の綱領のように唱えて指導権を握ろうとした。実際、一九一七年三月に工場委員会から出された労働者の要求は主として彼らの経済的生活条件―八時間労働日・賃上げ・衛生状態の改善・出来高給反対―に関するものであった。政治的要求に関しては、彼らほとりわけ民主共和国と憲法制定会議の開会を求めた。「労働者たちは自分たちの生活状態の改善を望んでいた」であり、それを一変させたがっていたわけではなく、実際には生産関係変革の要求はなかった。これに対して農民は、なによりも国家や領土の没収―国有化ではない―を望んでおり、政治的要求としては民主共和国と迅速かつ公正な和平を求めていた(フェロ、一九六七年、一八三―一八八頁)。ロシアの労働者がなканずく前資本主義的制度の解体を目指した点では、二月は多元的性格を伴う大衆的自発性と独創性に溢れた環境の中でブルジョア革命を開始した。

一九一七年四月にレーニン Lenin が「革命の第二段階」と呼んだように、それはそれほど異なっていたことだろう！ ポリシエヴィキは、一九一七年春には黨員数二万人余りのちっぽけな党から、一〇月までに多数のソヴェト、特に重要なのは大都市や工業地区で多数派を占め、黨員数三〇万の巨大な党に成長した(シャプロ Schapiro、一九六〇年、一六八頁)。彼らは間断なく大衆の支持を獲得した。ほかの党よりも次第に過激化する労働者の深い革命的欲求を読み取り、労働者が求めるものを自分たちの大衆スローガン―(三月初めにレーニンによって考案された)「土地、パン、自由」―の中に採り入れた。レーニンは、その密接なつながりが、自党の影響よりもはるかに強く労働者や兵士をソヴェトに結びつけることをよく理解していた。彼はポリシエヴィキ綱領のスローガン「全権力を労働者・貧農に」と「全権力をソヴェトに」という人氣のスローガンを一体化した(アンワイラー Anweiler、一九五八年、二〇三頁)¹⁰。ありていに言えば、我々が著書の中で一九一七年の出来事について手短に述べたことは、(ヘインズが指摘する)「その革命の人民的性格」の「確実性」とも、確かに「大衆の支持による支配を期待した」ポリシエ

ヴィキへの「大衆支持」の増大とも矛盾しない（ヘインズ、六三頁）。我々が（詳述せず）異議を唱えたのは、その革命のプロレタリア性、ポリシエヴィキによる権力掌握の大衆的性格、そしてプロレタリア独裁確立の主張に対してである。それは物質的主観的必要条件を欠いているので（少なくともマルクスのいう意味では）プロレタリア（社会主義）革命ではありえない。その国が「社会主義革命」に突入するよう喚起される物質的条件については、ロシアはその時期、都市部に住む住民が六分の一にすぎない圧倒的に農民の国であった（プロコポヴィチ Prokopovich、一九五二年、二二、三八頁／デイヴィス Davies、一九九一年、一一〜一二頁）。「都市の生活状態や労働過程全体は、西ヨーロッパでは前世紀以前の水準、おそらくフランスの都市生活水準では一六世紀頃に支配的であった水準に止まっていた」（ルーウィン Lewin、一九八五年、五二頁）。

更にまた、その時期、農村部に小資本家的「クラーク」と貧農及び雇用労働者の間に和解しがたい階級対立があったとするレーニンの主張は（経済）史家の支持を得られるものではない。実際のところ、一九一三年に雇用労働を専らとする都市世帯の割合は〇・一％以下であり、農業での雇用労働にのみ従事する土地を持たない農村プロレタリアートはほとんど存在しなかった。要するに、一九一四年以前に小作農を種別する見方を支持する証拠はなにもなさそうである（デイヴィス、一九九一年、一九頁／マール Malte、一九九一年、四八、六四、六五頁¹¹）。一般的に言えば、一九二二年にレーニン自身がポリシエヴィキの勝利以前の「中世的慣習、封建制、農奴制」の存在を肯定したことは、正しくロシアが社会主義革命の物質的準備ができていないことを立証している。外国資本の下で働く工業プロレタリアートに関しては、全住民の二％にも満たなかった（グロスマン Grossman、一九七三年、四九三頁）。物質的条件のなさ（社会経済的後進状態）に目をつぶり、主観的要素だけを考慮しても、レーニン自身が一九一九年に述べているように、「低文化水準」にあるロシアの「労働大衆」が（国の）管理に参加するのは不可能であった。一〇月の権力掌握の場合でいうと、たいていの歴史家によって裏付けられているように、ほとんど取るに

足りない数の——全住民の大海の一滴にすぎない——工業プロレタリアートがそれに参加したにすぎない。一〇月反乱は決して労働大衆の積極的参加を伴った本当の大衆蜂起——二月とは対照的に——ではなかった。トロツキーは一〇月に、「革命の最終行動はあまりにも呆気なく、あまりにも事務的に見える。大群衆の行動が全くない……一〇月革命時の街頭の様子は平静で、群衆も戦闘も（なかつた）」（一九八七年、第三卷、二三二、二九二、二九三頁、強調は筆者）と記している。歴史家の研究からもわかるように、その反乱は「大衆蜂起のない」、「いずれもそれほど戦意のない二つの小集団の衝突でしかない」「小規模な劇的出来事」だけのものであった。ペトログラードのほとんどは民衆はこの「大衆」反乱が起こっていることを知らずにいた。「臨時政府のメンバーでさえ権力が既に自分たちの手からすべり落ちてしまったことに気づかなかつた」（テイラー Taylor、一九七七年、XVI／ヘラーとネクリッチ Heller and Nekrich、一九八二年、三二頁）¹²。

レーニンは、「全権力をソヴェトに」と公言する一方で、実際には、権力を行使するソヴェトを全く信頼していなかった。このことはその時期の彼自身の見解から明らかである。彼は自党単独の権力獲得とその維持に賛成していた。それゆえ、ポリシエヴィキが取るに足らない少数派であつた（一九一七年）六月のソヴェト第一回大会でレーニンは、自党は独力で権力を取る準備ができていと声明した。八月三〇日、レーニンは、一旦党が権力を握つたならば、それを手放さないと断言した。レーニンの徹底したソヴェト民主主義不信は、自分の党がペトログラード・ソヴェト、モスクワ・ソヴェト、その他いくつかの都市のソヴェトで多数派になりつつあるか、多数派になつた時期にも見受けられる。九月末、「危機は熟している」という小論の中で彼は、「ソヴェト大会を『待つ』ことは、完全な愚行か、でなければ全くの背信行為であろう」と、というのも「その大会は何ももたらさないであろうし、またなにももたらすことはできないからである」（強調は原文）と表明した。同様に、九月と一〇月初めに書かれた別個の手紙の中でも、「ソヴェト大会を待つことは子供じみた恥ずべき手続き遊戯であり、革命への裏切りである」と主

張した。結局、レーニン主義的見解に従って、一握りの人間たちの決定に基づいて―労働者の自治機関とは協議も通知もしないまま―権力はボリシェヴィキによって、実際には「ケレンスキーからではなくソヴェトから」奪取された(テイラー、一九七七年、XII)。確かに、労働者自身の創造物どころか、「ボリシェヴィキ党はレーニンの創造物であった・・・彼はその党の指導者として代え難い存在だった・・・(権力奪取について)明確な違いが起こったとき、指導部から退くぞとのレーニンの脅しはほかのどの議論よりも効果的であった」(メドヴェージェフ Medvedev、一九七九年、一四頁)。一〇月権力奪取が、自分たちの集団的発意で権力を掌握した労働大衆(一八七一年コミューン)と無関係であったことは、トロツキーの**亡命日記**の中の記述にもはっきりでている。「もしレーニンも私も一九一七年にペテルスブルクにいなかったなら、一〇月革命はなかったであろう」(クナイパズ Knai-pazの引用、一九七八年、二三〇頁)。もしこれが一〇月反乱―「プロレタリア革命」と受け取られている―の現実であるならば、その場合、ヘインズの言うように「歴史から切り離してロシア革命の人民的土台を記述した」のは、レーニンとその仲間たちであることは明白である。トロツキー自身の記述から明らかのように、党員を含むボリシェヴィキの熱烈な支持者でさえ、党によってではなく、ソヴェトによる権力の掌握を望んだのである(トロツキー、一九八七年、第三巻、特に二八二―八三頁)。ソヴェト第二回大会へのボリシェヴィキ代表団は、将来の政府形態に関する見解を問われて、多数派同様、「全権力をソヴェトに」と答えた。「ボリシェヴィキ的な権力独占の考えは圧倒的多数の者には決して頭に浮かばなかった」(シャピロ、一九六〇年、一七〇頁／一九六八年、二二三頁)。「歴史家たちは、労働者や兵士がソヴェト権力に賛成票を投じた、つまり左翼政党からなる複数政党政府を選択していたと一致して考えているようだ」(サニーSuny、一九八七年、一七頁)。労働者自身によるのではなく、党単独で権力を奪取し行使することは、その時期のレーニン自身の正直な包み隠しのない言明の中に、ここでは言及しきれないほど数多く出ている。

ポリシエヴィキが権力を握る上で最後の民主的障害は憲法制定会議であったが、ポリシエヴィキは権力奪取まで声高にその開催を支持しており、事実、勝利した直後（二〇月二六日）にもレーニンはこの立場を再度肯定し、社会革命党がそこで多数派に選出されても、ポリシエヴィキはそれを受け入れると付け加えた。しかしながら、一九一八年一月初めに「ロシアの最初で最後の、唯一の自由かつ民主的な普通選挙」（ダニエルズ、一九六七年、二二二頁）に基づき、社会革命党が絶対多数を獲得して会議が開催された時、その政治組織はポリシエヴィキとその同盟者によって「反革命的」と宣言され、一〇月革命の完全な意味をまだ理解できない「圧倒的多数の民衆」に代わって単独で決定を下すレーニンの発議に基づいて政府により解散させられた。「六カ月後、ポリシエヴィキ以外のすべての政党が……禁止され、テロが始まり、そして新たな全体主義的独裁現象がロシアの前途を引き継ぎ始めていた」（ダニエルズ、一九六七年、二二二〜二三頁／一九七二年、一七五〜七六頁）。

「勝利感」に酔う時期が過ぎ、戦後の大量復員があり、一九一八年冬に国民経済が急速に減退すると、労働者の「自分たちのものと思われている——新体制への不満が急速に高まり、政府に対して多数の人々による抗議やデモが増加しだした。「ポリシエヴィキと労働者階級との関係において、公然たる敵対、弾圧、そしてプロレタリアートを支配する独裁の強化へと向かう第三段階が展開し始めた」（ローゼンベルグ *Rosenberg*、一九八七年、一一七頁）。

一九一八年三月三日開催の「臨時」大会で、鉄道作業場、電力発電所、印刷工場などのペトログラードの大工場の代表者たちは、全ロシアソヴェト会議に送られた宣言の中で、「我々、ペトログラードの大多数の労働者は、我々の了承も関与もなしに『我々の』名において（二〇月に）遂行された体制変化を受け入れてきた。自らを労働政府と宣言する新政権は、我々の願望を実現し、我々の利益を尊重すると約束した。四ヶ月経ち、我々は我々の信頼が笑い種になり、我々の希望が踏みにじられるのを目にしている」（ヘラーとネクリッチからの引用、一九八二年、四七頁、強調は筆者）。メドヴェージェフが言うように「ポリシエヴィキから離反した大衆が選択した方向」は、一九一

八年春と夏のソヴェト選挙で示された—ポリシェヴィキは地歩を失いつつあった。

民衆の既成政権への不満は、一九二〇—二一年の内戦末期に新たな高みに達し、いくつもの都市部で表面化した。特にペトログラードの、元はポリシェヴィキの牙城であった諸工場で大規模かつ激烈だった。赤軍兵士もデモに加わらねば、靴さえも貰えなくなった。「ペトログラードでの一九二一年二月は、驚くべきことに一九一七年二月を思い起こさせた」(ヘラーとネクリツチ、一九八二年、八九頁)。その状況を包括的に言及して、ドイツチャー・Deutscherは、「農民は言うに及ばず、労働者階級の大半が、紛れもなくポリシェヴィキ反対に変わった。もし今ポリシェヴィキが自由なソヴェト選挙を許したなら、ほぼ確実に権力から一掃されたであろう」(一九六三年、五〇四、五〇五頁)と書いている。

「歴史から切り離して」民衆を「記述する」ドラマの最終場面は、一九二一年二—三月にクロンシュタットで上演された。ペトログラードでの出来事を知るや否や、二隻の戦艦乗組員から選ばれたクロンシュタットの視察団がそこに赴いた。彼らは工場周辺を調査し、労働者がひどい困窮と恐怖の下に置かれており、投獄されている者も多くいる真相を知った。クロンシュタットに戻り、彼らは乗組員総会に調査結果を報告した。その結果、一五項目からなる決議が採択された—その内の主な項目は、(1)既存ソヴェトは労働者の意思を表していないがゆえに、秘密投票による新たなソヴェト選挙を、(2)及び(3)言論、出版そして全左翼組織と労働者の集会の自由を、(5)左翼政党及び労働者の全政治犯、そして監禁されている赤軍軍人の釈放を、(11)農民が雇用労働なしに私有地を耕作する権利を、であった。決議は三月一日に約一万五〇〇〇人の水兵、兵士及び市民からなる大会で「ほぼ満場一致で」採択された。労働者たちに決議について知らせるためにペトログラードに派遣された代表団は即座に逮捕された。戒厳令がその地区全体に布告された。ポリシェヴィキ政権はそうした不満の正当性を一切否定し、クロンシュタット市民の行動を白軍将官に率いられた反革命運動として非難した。こうしたプロパガンダを裏付ける証拠は一片もなかった。

レーニン自身が第一〇回党大会の会期中に、「彼らは白軍の保護を望んでいないし、我々の権力も望んでいない」ことを認めた。トロツキーとジノヴィエフはクロンシュタット市民に無条件降伏を命じ、不服従の場合には軍事力を行使し、そのときは「獵鳥のように」「射殺する」と脅した。彼らに対する軍事作戦は三月七日に始まった。翌日、地区革命委員会は長文の感銘的な宣言「我々は何のために戦っているのか」を出した。その宣言の中でとりわけ主張されたことは、一〇月革命が労働者階級における解放の希望を燃え立たせた後に人間をより大規模に奴隷状態に置く結果になったこと、警察や憲兵による専制君主権力が共産主義的強奪者の手に渡ったこと、ロシア共産党が自ら装うような労働者の擁護者でないことは明白であること、それは新たな農奴制を創り出したこと、最後に、クロンシュタットでは労働大衆から最後の鎖を打ち払い、社会主義的創造力のための遮るものない新路を開く第三革命の最初の礎が築かれたことであつた。もちろん、「共産党にとって、一〇月の諸原理を共産主義者たちに対して擁護する運動としてのクロンシュタットの理念——「第三革命」という理念——を抑圧することが絶対に必要であつた」(ダニエルズ、一九六〇年、一四四頁)。結局、最大五〇〇〇人のクロンシュタット市民に対して五万人の戦闘部隊を派遣した政権側が勝ち、反乱を血の海の中に沈めた(ヘラーとネクリツチ、一九八二年、九一頁)。こうして「赤色クロンシュタット」は終焉した。それは「パニコミューン時代以来ヨーロッパでは姿を消してしまつた、あの活気ある、自治的で、平等主義的で、そして高度に政治的な議会民主主義を生み出したのであつた」(ゲツラー、一九八三年、二四六頁)。

IV ロシア一九一七〜一九二八年

ヘインズは我々を批判して、「ネップ期ロシアを資本主義の純然たる発現とするのは意味をなさず」、一九一七年

と一九二八年の間に「ロシアには資本主義の直接支配はなく、(むしろ)諸力が複合的に存在していた」と述べる。(六四、六五頁)。レーニン自身が第八回党大会(一九一八年)で「ロシアでさえ資本主義的商品経済が存在し、機能しかつ発展している」と主張しているのだから、こうした現実を直視しない態度は奇妙にみえる。更にいえば、レーニンはその時期の複数の文章の中で、少なくとも「相当な範囲で相当な期間」、もちろん「プロレタリア国家」の下で、ロシアにおいて資本主義が発達することの望ましさを肯定した。一九一七〜一九二八年の現実はいくつの見解の正しさを立証した。一九二一年九月一〇日の政令は賃金制度を産業発展の基本要素と記述しており、賃金及び雇用は労働者と当該企業間の自由協議契約に基づく当事者間問題と見做されていた。「一年も経たないうちに、ネップは資本主義経済の特質を再生した」(カーCar、一九六三年、三二〇、三二一、三三三頁)。データもこのことを裏付けている。例えば、総人口に占める―手工芸や農業における―自立的商品生産者の割合が一九二四〜一九二八年に七五%水準で一定しているのに対して、「労働者及び従業員」―すなわち賃金及び給料生活者―の割合がこの期間に一五%から一八%に高まった(国民経済統計Narkhoz、一九八七年、一一頁)。資本主義的發展の初期段階を示す指標として注目できるのは、冶金工業と炭鉱業で農家出身の労働者の割合が、一九一八〜一九二五年間の平均四三・四%から一九二六〜一九二七年に五三・五%へと増加したことである。工業生産全体をとってみると、その指数は一九二二〜一九二三年の三九・五から一九二七〜一九二八年には一一九・六へと上昇した(一九一三年を一〇〇とする)。工業労働者数は同期間に二倍になり、一・四百万人から二・八百万人に増加した(プロコポヴィチ、一九五二年、二七九、二八三頁)。大規模工業の総産出額は、一九二六〜一九二七年価格で、一九二二年の一九億ルーブルから一九二八年に一五七億ルーブルに伸びた(バイコフBaykov、一九七〇年、一一二頁/国民経済統計、一九二二〜八二年、一五二頁)。工業經濟の發展はもちろん賃労働を基礎としていた。

ヘインズによると、我々は「一九二八年以降の質的变化」に無頓着であるらしい。そこで彼はその指標として、

一九二八年以降の体制が「工場委員会を除去し、労働組合を伝導ベルトに変える必要」に気づいた点を力説する(六七頁)。まず指摘しておくが、我々は、正しく一〇月に党¹国家支配が始まってソヴェトが消滅するとともに、次第に工場委員会制度も消滅していったことについて言及している(拙著、一五二、一五三、一五五頁)。我々がここで付け足すことは、一九二八年以前に、レーニン自身の支配下にある権力で開始されたプロセスとして、工場委員会は確実に「清算される」進路に向かわされ、労働組合は「伝導ベルト」に変わったということである。一九一七年一〇月二六、七日にレーニンによってまとめられた「労働者管理規則案」では、選出された労働者代表による決定が労働組合及びその大会で取り消されうること(五項)、国家的重要性のある全ての企業では、労働者代表同様、所有者は秩序と規律の維持及び資産保護のために国家に責任を負うこと(六項)とした。一九一八年二月、工場委員会と労働組合の合同会議は前者の后者への従属で意見が一致した。出された公示(一九一八年二月一四日)では、企業は、「ヴェセンハ(最高国民経済会議)」と「ソヴナルコム(人民委員会)」の共同布令による以外、工場委員会により既存の所有者から接收されることはないと言われた(ドップ、一九六六年、九〇、九一頁)。確かに、ポリシエヴィキは、工場委員会による労働者自主管理についてレーニンが以前にした発言を文字通り実践する企業で、徹底した民主主義の危険性に自分たちが直面してことに初めて気づいた。活路を開くために、ポリシエヴィキは、自分たちが現在多数派を占めている労働組合を頼みとした。労働組合は全ロシア工場委員会大会の招集を妨げなければ、それが、それらを単に自組織の最下位機関として組み入れた(アンワイラー、一九五八年、二七七頁)。この「工場委員会を清算する」過程は、強制労働収容所、企業長単独責任制、テイラー・システム、出来高賃金、労働手帳のよくな、労働階級に「規律を守らせる」ために当局によって並行して実施された措置とともに研究されねばならない(カー、一九六三年、一九八、二二六頁)。第九回党大会(一九二〇年)でレーニンは、「悪名高い民主制」に対する闘争の必要性と、「任命制に対するこれら全ての罵声、これらすべての古い有害なガラクタ」を一掃する必要があるについ

て演説した。

労働組合とはいえば、それらは既に他ならぬレーニン自身によって「伝導ベルトに変えられて」いた。レーニンがその一年以上前に言ったことを取り上げると、彼は労働組合に関する決定草案（一九二二年一月二日）の中で、「共産党から大衆への伝導ベルト」たる労働組合を「発動機と機械を連結する伝導ベルト」に例えている。ドップ Dobb は、一九二〇年代初頃にはもう労働者の中に、労働組合は彼らを政府の意向に黙従されるための道具との疑念の広がりがあったことに注目する。「労働組合は普通の国家機関となんら違いがないと見做されるようになった」（ドップ、一九六六年、一一八頁）。

V 内戦と世界革命

ヘインズは、一〇月後のロシアで「社会主義が成立」しなかったのは、内戦と国際的に「急拡大する革命」が起ころなかつたためだとする（六四頁）。まず内戦について若干述べることにしよう。我々は一九一七年にロシアに社会主義を建設する諸条件があつたとする考えを否定するが、内戦がポリシェヴィキのやろうとしていたことを妨げた点は認める。しかしながら、内戦が全く「反革命派」の仕業というのは誤りであろう。ポリシェヴィキの政策もまた「階級戦争」の名においてその要因となつた。客観的要因から始めると、ほぼ都市政党であつたポリシェヴィキは、やや誇張していえば、国の大多数の人間から遊離していた。一〇月反乱前夜で農民党员は五〇〇名ほどしかなかった。一九二〇年代末でさえ、農民は全党員数の七分の一だけで、「ほとんどの農民にとってソヴェト体制はなおも異質かつ外部の支配力だつた」（テイヴィス、一九八〇年、五二、五四頁）。ところで、戦時共産主義の経済的難問は農民との関係であつた。都市住民を養うために「階級戦争」の名の下に農民から余剰穀物を強制徴発した

ことが、この関係に汚点をつけた。一九一八年五月一三〜一四日―内戦は全く始まっていなかった―に、ソヴェト中央執行委員会(ツェイカー)は、余剩穀物を保有しながら固定価格で申告するのを拒む農民は「人民の敵と宣告され、市民権を剥奪されかつ裁判に掛けられる」と布告すると同時に、食糧調達人民委員部(ナルコムプロド)にその後「食糧独裁」として知られる非常全権を付与した。これは「必要以上の余剩穀物を保有する農民に対する戦争宣言」であった(マール、一九八五年、三六一頁)。一九一八年七月には「銃を突きつけて」徴発を実施するために貧農委員会が設立された。こうして「空疎にも『階級戦争』と見せ掛けられた農民に対する無慈悲な戦いが引き起こされた」(シャピロ、一九六〇年、一八八、一八九頁)。ところで、「クラークに対する無慈悲な戦い」というレーニンの見解は内戦前に出されており、二月以後の小作農の革命行動が「一九一七年以前に農村部で経験したわずかな資本主義的発展をも取り除いて」しまっており、「果たして『プチ・ブルジョア』という言葉が社会経済的定義として農民に適用されるか疑問に思われる」(ノーヴ、一九八二年、五四頁/レヴィン、一九八五年、二九八〜九九頁)ほどで、彼の見解は現実的意味がなかった。⁽¹⁵⁾ ドップは、ポリシエヴィキ政権の政策が「クラーク―村の取るに足らない少数派―だけでなく、農村部で多数をなす大半の中農をも敵に回した」ことを認める(一九六六年、一〇五頁)。これらの政策は、メドヴェージェフが言い添えるように、「コサックや都市プチ・ブルジョア同様に、小作農や元兵士の大半をポリシエヴィキ反対に変え、内戦を引き起こすのに必要な不満を抱く大衆を反革命運動に差し出すことになった」(一九七九年、一八〇頁、強調は筆者)。

次に世界革命の問題に移ろう。ポリシエヴィキ―特にレーニンとトロツキー―は、世界革命が到来し、単独では結局生き残れないであろう自分たちの体制を救済してくれることを大いに当てにしていた。一九一七〜一九一八年に出された様々な意見表明の中で、レーニンは早くも「世界社会主義革命の成熟」とか「急速に熟する国際的プロレタリア革命」といった表現を用いている。レーニンには、ドイツ海軍内の反乱がこれを例証しているように見え

た。しかしながら、あいにくドイツ労働者の大半は「既存の社会秩序を転覆し、普通の労働者が統治する体制と取り替えることを望んでいなかった」(ムーア、一九七八年、三五二頁)。ポリシェヴィキはヨーロッパの労働者の革命的傾向を極めて過大視していた。同様に、外国人ブルジョアジーの下では先進的なものがあつたものの、大抵は非常に遅れた資本主義を経験してことから、ポリシェヴィキは「最も献身的かつ精神的な指導者でも、統率のとれた党でも、滅ぼしえない」ヨーロッパ・ブルジョアジーの巨大な力をひどく見くびつていた(パンネコック *Pannekoek*、一九八二年、一四二頁)。自分たちが世界の中でどれほど隔絶しているかがわからない「初期ポリシェヴィズムの精神的無能さ」——特にトロツキーに見られるような——について、ドイツチャーは、「レーニンもトロツキーに劣らないほどこうした(世界)革命幻想に耽けていた」が、「興奮を催す予言に溺れる欠点をもつ(トロツキーは)いつそう取り返しのつかない失策をすることになった」と論評する(一九六三年、四五〇、四五二頁)。

もちろん、ポリシェヴィキは一九一七〜一九一八年の革命の不発とは直接関係があるわけではなかった。しかしながら、一九一九年以来、彼らは第三インターナショナルを設立し、自分たちの「プロレタリア革命」をひな型にしてロシア国外に革命を広める事業を開始し指揮した。戦時中社会愛国主義を拒否したり、あるいは戦後そのことを反省した全ての労働者階級政党を新たなインターナショナルの中に取り込むことを意図した、ヨーロッパ労働者階級運動におけるいわゆる「再建派」潮流の計画に対抗して、レーニンは「社会愛国者」だけでなく、労働運動中の平和主義者も新組織から「エラトステネスの名高い「ふるい」に匹敵する嚴重な排除過程を通じて——締め出すことに成功した。「ポリシェヴィキは今や、他国の労働運動との友好関係を模索する代わりに、それらと袂を分かち始め、(それによつて)社会民主主義者を妥協し難い敵とし、さもなければ期待できたはずの海外における支持を喪失した」(ボルケナウ *Borkenau*、一九六二年、一八七頁)。このことはもちろん彼ら自身の孤立の重大な一因となつた。実際、新しいインターナショナルの設立大会はなんら代表的性格を有さなかつた。西ヨーロッパの社会主義的

大組織からは代表が全く来なかった。ちつぽけなスパルタクス党から一人の本物の労働者代表がローザ・ルクセンブルグからのある指示を携えてやって来たが、適切な設立条件を欠いた新インターナショナルの即時創設に反対するためであり、この際ロシアの経験の重みが過大になることを懸念してのことであった(クリーゲル *Kriegel*、一九八三年、二四頁/ドイッチャー、一九六三年、四五頁/ボルケナウ、一九六二年、八七、八九頁)。あるトロツキ主義的歴史家はその大会の代表的性格のなさとして、参加者が大体「既にロシアに住んでいるか、代表となった諸国の実際の運動をおよそ代表していない」人々であった点に注目する(フランク *Frank*、一九七五年、四六〇-四七頁)。西ヨーロッパの左翼社会主義的指導者には、他の点ではポリシェヴィキに共感できても、ロシア人が提起した有名な(恥ずべき)二一ヶ条からなる新組織加盟条件の大半が全くもって受け入れ難かった。それらは、例えば、全ての共産党における定期的粛清、軍規同然の鉄の規律を持った党組織、労働者の「唯一の世界党」としてのコミンテルン承認、反戦国際主義者などを含む傑出した労働指導者の排除等々であった(クリーゲル、一九八三年、七七頁)¹⁶。

ポリシェヴィキの国際主義にはナポレオンの感触さえあった。第二回コミンテルン大会の会期中には、赤軍がポーランドでまもなく革命の炎を更に西進させるものと期待されていた。レーニンがフランス代表に次のように語った。「じきにドイツが我々のものになるでしょう……バルカン諸国民は資本主義に反対して立ち上がるでしょう。イタリアは震撼しますよ。ブルジョアのヨーロッパはどこも大騒動でひびが入っています」(ヘラーとネックリッチ、一九八二年、八〇頁、L・O・フロサード代表からの引用)。西側での革命の失敗に失望して、ポリシェヴィキはロシアよりも更に後進的な東洋で展開する世界革命を期待し、トロツキーはインドで使われる遠征騎兵隊の編成計画を構想するほどだった(ドイッチャー、一九六三年、四五七頁)。

VI 結論、あるいはマルクスはいかに最後に笑い返したか

一九一七年一〇月革命から出現した体制の究極的消滅は、その体制の非社会主義性の見地からではなく、それが体現した特殊な型の資本主義という見地から分析されねばならない。結局のところ、それは画期的とはいえない、官僚的束縛で不効率運営の資本主義であることを証明し、マルクスが資本の絶対的過剰蓄積（著書の中で広範囲にわたった論じた）と呼ぶ危機の下で崩壊した。一九一七年二月は、上述したように、自由な多元性という特徴を持つ自発的大衆性があれば、後の時代―しかるべき物的条件が揃った場合―に、もし参加した労働者階級が―自分たち（自身）の自主管理機関を通じて―前進し続ける完全な自由が認められれば、（マルクスの意味での）真の社会主義革命に転化する潜在力を孕むブルジョア民主革命を開始した。ポリシェヴィキの権力奪取は、その進行にブレーキを掛け、革命の民主的部分―「悪名高い民主主義」（レーニン）と軽蔑的に呼ばれた―を打ち碎き、ブルジョア的部分を促進した。しかし、それもまた、未曾有の蓄積衝動を持ったレーニンの後継者の支配下で先進資本主義国に「追いつき、追い越す」という―レーニン（一九一七年九月）から原文通りに引き継がれた―スローガン（党決議集 *Fesheniya*、一九六七年、五三九頁）の下に行われ、当然発達が妨げられた。

レーニン（及びトロツキー）は、マルクスの唯物論（と解放に向けた）社会主義革命アプローチを完全に転倒させた。マルクスは、バクーニン批判（一八七四―七五年）の中で社会主義革命について触れ、「徹底した社会革命は、経済発展の一定の歴史的諸条件と堅く結びついている。後者はその前提条件である。それゆえに、資本主義的発展とともに工業プロレタリアートが少なくとも相当な地位を占めるようになったところではじめて可能である」と記している。それから彼は、「バクーニンは社会革命について全く何も理解しておらず、あるのはそれについての政治的空語だけである。彼にとって、そのための経済的諸条件など存在しないのだ」（マルクス、一九七三年b、六三三

頁、強調は筆者）と付け加える。確かに、「新しいより高度な生産関係は、その物質的存在条件が古い社会自身の胎内（十分に）成熟する前に現れることはない」（マルクス、一九八〇年、一〇一頁）。こうした社会主義革命―また同じことだが、自由で連係する個人からなる社会の建設―の「歴史的（物質的）諸条件」は、社会の中で「相当な地位」を占める「最大の生産力」であるプロレタリアートだけでなく、労働と生産の社会化を伴う生産力の全般的发展である。そしてそうした条件を創り出すのは資本だけである。実に、社会主義は「資本主義社会の胎内から生まれ出る」（マルクス、一九五三年、六三五〜三六頁／一九六二年 a、七九〇〜九一頁／一九六二年 b、三二二頁／一九六五年、一三五頁／一九六六年、一七八頁）。

このような唯物論的見方に対して、レーニンは「世界資本主義連鎖の『最も弱い環』」である後進資本主義国における社会主義革命の可能性テーゼ（トロツキーも全面的に共有）を提起する。「事態はマルクスやエンゲルスが予期したものとは違つて起こつた」と一九一八年一月にレーニンは力説した。¹⁷レーニンの「最も弱い環」という主張は、ポリシェヴィキ体制に共感する人々同様に、主だった左翼の教義になった。我々は著書の中で、この点に関してマルクスに反対してレーニンの味方をした者としてカー、ドイツチャーそしてスウィージーを引き合いに出している。同様に、グラムシ Gramsci がポリシェヴィキの勝利後まもなく、プロレタリアートが自らの革命を行えるようになるまでは「ブルジョアジーの形成と資本主義時代の開始という宿命的必然性の証明」をした資本論に反対して、「事実よりイデオロギー……史的唯物論の教義……が優先されている」（一九七三年、一三〇頁）と述べている。

しかしながら、彼らはマルクスを退けるのが性急過ぎた。レーニンがすぐ悟つたように、ロシアの後進性ゆえに、先進資本主義諸国に「追いつき、追い越す」以外に取るべき進路がなかった―それは取りも直さず生産力と先進的労働者階級の急速な増大を意味し、このためには正しく資本主義の発展が必要であつた。というのも、ロシアは、社会主義建設の事業が始まれないかなり前資本主義的な国であつたからだ。¹⁸レーニンの発議と指導力で新体制が

とつた措置も、その時期のレーニン自身の表明も、はつきりとこの国が資本主義の進路をたどっていることを示した。¹⁹この全てが、社会の「自然な発展段階は決して飛び越えることも、それらを法令で取り除くこともできない」（マルクス、一九六二年a、一六頁）ことを証明している。事実二〇世紀のいわゆる（誤称の）「社会主義」革命は、「もし社会の中に階級のない社会の物的生産条件とそれに照応する流通関係が潜在していなければ、その社会を打破しようとするあらゆる企てがドン・キホーテ的となるう」（マルクス、一九五三年、七七頁）というマルクスの洞察力に満ちた予測の正しさを証明したにすぎない。正しく最後に笑ったのはマルクスであった。

(1) イストヴァン・メスザロス (Istvan Meszaros, "Beyond Capital", Monthly Review Press, 1966) を参照せよ。

(2) マルクスがエンゲルスへの手紙（一八五九年七月二二日）の中で述べているように、資本論の商品形態の箇所で分析されていることは、「決してブルジョアの生産の絶対的性格ではなく、その特異な社会的性格である」（一九七二年、一〇〇頁、強調は原文）。

(3) マルクスは、社会が「その生産過程の自然成長的姿態に与えたこの最初の意識的かつ計画的な反作用」としてイギリスの工場法の例を挙げ、国家が「強制法を押し付け」て資本自体の存続と拡大再生産のために「資本の生産過程自体に直接干渉する」ことをはつきりと力説している（一九六二年a、五〇四、五〇五頁）。これに関して、マウロ・デイ・リサDi Lisaによる興味深い論文を参照せよ（一九八六年、一四九〜一七八頁）。

(4) 資本論のいわゆる「第六章」同様、フランス語版の資本論の中では、「出発点」という的確な表現が「始まる」に入れ替わる。（一九六五年、五六二頁／一九八八年、二四頁）を参照せよ。

(5) 真正の反スターリン主義者はめつたにも一九一七―一九二八年の間のソ連邦の社会的生産関係の問題（ヘーゲルの有名な表現を使えば）「主と僕」指定期間―を取り上げない。

(6) これら二つの中心概念が、第二インターナショナルや第三インターナショナルの大半の「マルクス主義者」によって述べられたものとマルクスの考えとは厳密には同じでないと強調されねばならないし、またそれは簡単に証明できることである。

(7) 資本間競争をソ連邦に外から「プラトンが世界形成者と考えた」デミウルゴスのように振舞う「グローバル経済」によって押

しつけられたものとヘインズのように理解することはジレンマから抜け出す一つの方法のようである。それはつまり、一方でソ連邦を資本主義と規定し、相互に競争し合う自立的資本単位の存在を暗示しながら、他方で生産手段の所有は国有のみという仮定に基づきソ連邦における生産単位の自主性を否定するからである。トロツキー主義者は、ソ連邦における資本主義の存在を一貫して否定しているのでこうしたジレンマには直面しないらしい。

(8) リカードは決して自分の公式を「法則」と呼ばなかった。このリカードの公式を「法則」と呼んだのはマルクスである。

(9) 「ボリシェヴィキは農民反乱の上げ潮に乗って政権の座に就いた」(フーヴ、一九八二年、四九頁)。

(10) 「ボリシェヴィキは自党を人民の譲歩不可能な要求の実現手段として売り込み、とてつもない党勢拡大に成功した」(ダニエルズ Daniels, 一九六七年、三四頁)。

(11) ロシアにおける小作農の分化に関するレーニンのテーゼの厳密かつ詳細な批判としてはルーイLoweを参照せよ(一九八四年、七二〜一三頁)。

(12) ある著名な歴史家がその証拠を次のように要約している。「(その反乱が)どんなであったかといえば、たいがい多少の口論や名ばかりの抵抗を伴う、一連の建物の前の衛兵の交代にすぎなかった」(ムーアMoore、一九七八年、三七四頁)。

(13) メドヴェージェフ(一九七九年、選挙の詳細については一四八〜四九頁)を参照せよ。

(14) おそらくクロンシュタット(一九一七〜一九二二年)に関する最良のドキュメント図書は著名な歴史家イスラエル・ゲツラー(一九八三年)の手によるもので、後の研究者は主に彼の記事を基にしている。そのドキュメントの短評としてR・A・ウエイド Wade(一九九三年、二〇二〜二〇六頁)も参照せよ。

(15) 先に我々は、ロシア農村部における資本主義的発展に関する一歴史家によって立証されたところのレーニンの誇張した描写について言及した。

(16) 第一インターナショナルに対するマルクスのアプローチとの対照は際立っていよう。

(17) トロツキーは、ロシア革命がマルクスの考えに一致していると断言する。いかなる社会構成体もその潜在力を汲み尽くすまで消滅しないというマルクスの主張に触れながら、帝国主義戦争は「資本主義システムが世界的規模で自ら消耗し尽くした」こと、そして「ロシアでの革命は全世界的資本主義システムにおける最も弱い一環の破綻であった」ことを実証したと記述している(一九八七年、第三巻、一七六頁)。

- (18) ロシア人との(フランス語による)文通(一八七七年、一八八一年)の中で、マルクスは驚くべき洞察力をもって、ロシアの農村共同体―一八六一年の(農奴「解放」に関する)ツァーリ勅令の結果―の分解が次第に進むと、ロシアは社会変革の前に「資本主義制度のあらゆる有為転変」に曝されることになろうと断言した(一九六八年、一五五二―一五七三頁)。
- (19) ロシア国外のレーニン主義的潮流の中で、このことを理解したのは―少なくともトップクラスの中では―A・ボルディガ **Bordiga** 唯一人であったようだ。ボリシエヴィキ勝利直後に、ボルディガは、「工場、事業所、銀行それに農場の国有化は既に革命の方策であるが、資本主義革命の方策である」(一九八〇年、一四四頁、強調は原文)。

【参考文献】

- Aganbegyan, A. *Soverskaya ekonomika - vzglyad na budushchee*, Moscow: Ekonomika.
- Anweiler, Oskar. 1958, *Die Ratebewegung in Russland 1905-1921*, Leiden: E.J. Brill.
- Baykov, Alexander. 1970, *The Development of the Soviet Economic System*. London: Cambridge University Press.
- Bordiga, Amadeo. 1980. *Proprieta e Capitale*, Florence: Iskra
- Borkenau, Franz. 1962. *World Communism*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Carr, E.H. 1963. *The Bolshevik Revolution*, volume 2, London: Macmillan.
- Daniels, Robert V. 1960. *The Conscience of the Revolution*. Cambridge: Harvard University Press.
- _____. 1967. *The Red October*. New York: Charles Scribner.
- _____. 1972. *The Russian Revolution*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
- Davies, R.W. 1980. *The Industrialisation of Soviet Russia*, vol 1: *The Socialist offensive*, London: Macmillan.
- Davies, R.W. (edited) 1991. *From Tsarism to the New Economic Policy*, Ithaca: Cornell University Press.
- Dobb, Maurice. 1966. *Soviet Economic Development since 1917*. New York: International Publishers.
- Deutscher, Isaac. 1963. *The Prophet Armed: Trotsky 1919-1921*. London: Oxford University Press.
- Ferro, Marc. 1966. *La Révolution de 1917*, vol 1, Paris: Aubier Montaigne.
- _____. 1980. *Des soviets au communisme bureaucratique*. Paris: Gallimard.

- Frank, Pierre. 1979. *Histoire de l'Internationale Communiste*. Paris: La Brèche.
- Gramsci, Antonio. 1973. *Scritti politici*, vol. 1. Rome: Editori Riuniti.
- Grossman, Gregory. 1977. "The Industrialisation of Russia and the Soviet Union" in *Carlo M. Cipolla (ed.) The Fontana Economic History of Europe: The Emergence of Industrial Societies*, Part Two (486-531). Glasgow: William Collins.
- Haynes, Mike. *Marxism and the Russian Question in the Wake of the Soviet Collapse*. 『ソ連の崩壊』 'Historical Materialism' 511
 ○〇三『世界史』『歴史』『経済』『文化』『政治』『社会』
- Heller, M. and Nekrich, A. 1982. *L'Utopie au pouvoir*. Paris: Calmann-Lévy.
- Knei-Paz, Baruch. 1978. *The Political Thought of Leon Trotsky*. Oxford: Clarendon Press.
- Kriegel, Annie. 1983. *Les internationales ouvrières (1864-1943)*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Lewin, Moshe. 1985. *The Making of the Soviet System: Essays in the Social History of Interwar Russia*. New York, Pantheon.
- Löwe, Heinz-Dietrich. 1984. "Lenins Thesen über Kapitalismus und soziale Differenzierung in der vorrevolutionären Bauerngesellschaft" in *Jahrbucher für Geschichte Osteuropas* 32 (72-113).
- Malle, Silvana. 1985. *The Economic Organization of War Communism 1918-1931*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marx Karl. 1953. *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*. Berlin: Dietz, Verlag.
- _____. 1956. *Theorien über den Mehrwert*, volume 1. Berlin: Dietz.
- _____. 1959. *Theorien über den Mehrwert*, volume 2. Berlin: Dietz.
- _____. 1962a. *Das Kapital*, volume 1. Berlin: Dietz.
- _____. 1962b. *Theorien über den Mehrwert*, volume 3. Berlin, Dietz.
- _____. 1962c. "Randglossen zu Adolph Wagners 'Lehrbuch' In Marx, Karl and Engels, Friedrich Werke (hereafter MEW) Berlin: Dietz.
- _____. 1964. *Das Kapital*, volume 3, Berlin: Dietz.
- _____. 1965. "Misère de la Philosophie," "Le Capital," livre premier, in *Karl Marx, Oeuvres: Économie*, volume 1, Paris:

- Gallimard).
- _____. 1966. "Manifest der kommunistischen Partei" and "Randglossen zum Programm der deutschen Arbeiterpartei" in *Karl Marx, Friedrich Engels, Studienausgabe*, volume 3, Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch.
- _____. 1968. "La Commune rurale et les perspectives révolutionnaires en Russie (1877, 1881)" in *Karl Marx, Oeuvres: Économie*, volume 2, Paris: Gallimard, 1968.
- _____. 1971. "The Civil War in France" in *Karl Marx and Friedrich Engels On the Paris Commune*. Moscow: Progress.
- _____. 1972. Letters to Weydemeyer (1.2. 1859) and Engels (22.7.1859) in *Karl Marx and Friedrich Engels, Briefe über "Das Kapital"*. Erlangen: Politladen.
- _____. 1973a. *Das Kapital*, volume 2, Berlin: Dietz.
- _____. 1973b. "Konzept von Bakunins Buch 'Staatlichkeit und Anarchie'" in *MEW*, volume 18. Berlin: Dietz.
- _____. 1976. "Zur Kritik der politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863)" in *Karl Marx and Friedrich Engels Gesamtausgabe* (hereinafter MEGA), Section 2, volume 3, Part 1. Berlin: Dietz.
- _____. 1980. "Ökonomische Manuskripte und Schriften (1858-1861)" in MEGA, Section 2, volume 2. Berlin: Dietz.
- _____. 1988. "Ökonomische Manuskripte (1863-1867)" in MEGA, Section 2, volume 4, Part 1. Berlin: Dietz.
- _____. 1992. "Ökonomische Manuskripte (1863-1867)" in MEGA, Section 2, volume 4, Part 2. Berlin: Dietz.
- Di Lisa, Mauro. 1986. "Antinomio del capitalismo e ruolo dello stato in Marx" in *Critica Marxista*, no. 5: 149-178.
- Medvedev, Roy. 1979. *The October Revolution*. New York: Columbia University Press.
- Merl, Stephan. 1991. "Socio-economic Differentiation of the Peasantry" in R.W. Davies (ed.) *From Tsarism to the New Economic Policy*. Ithaca: Cornell University Press
- Moore, J.R. Barrington. 1978. *Injustice: The Social Bases of Obedience and Revolt*, White Plains, New York: M.E. Sharpe.
- Narkhoz 1922-1982. 1982. *Narodnoe khoziaistvo SSSR 1922-1982: Jubileinyi Statisticheskii ezhegodnik*, Moscow.
- Narkhoz 1987. 1987. *Narodnoe khoziaistvo SSSR za 70 let*. Moscow.

- Nové, Alec. 1982. *An Economic History of the U.S.S.R.* Harmondsworth, Middlesex: Pelican.
- Pannekoek, Anton. 1982. *Les conseils ouvriers*, livre 1, Paris: Spartacus.
- Prokopovich, 1952. *Histoire économique de l'URSS*. Paris: Flammarion.
- Rosenberg, William. 1987. "Russian Labour and Bolshevik Power: Social Dimensions of Protest in Petrograd after October" in *Daniel Kaiser (ed.), The Workers' Revolution in Russia, 1917: The View from Below*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Resheniya partii i pravitel'stva po Khoziaistvennyim Voprosam*, Volume 1, 1967. Moscow: Politizdat.
- Schapiro, Leonard. 1960. *The Communist Party of the Soviet Union*. New York: Vintage books.
- _____. 1968. "Discussion on Dietrich Geyer's Paper" in *Richard Pipes (ed.) Revolutionary Russia*. Cambridge: Harvard University Press.
- Shkredov, V.P. 1967. *Ekonomika i pravo*, Moscow: Ekonomika.
- _____. 1988. "Sotsializm i sobstvennost'" in *Kommunist*, no. 12: 28-37.
- Suny, Ronald Grigor. 1987. "Revising the Old Story: the 1917 Revolution in Light of New Sources" in *Daniel Kaiser (ed.) The Workers' Revolution in Russia, 1917: The View from Below*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, A.J.P. 1977. "Introduction" in *John Reed, Ten Days that Shook the World*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin.
- Trotsky, Leon. 1987. *The History of the Russian Revolution*, volumes 1, 2, 3. New York: Pathfinder Book.
- Wade, Rex A. (Ed.) 1993. *Documents on Soviet History*, volume 2, Gulf Breeze, Florida: A